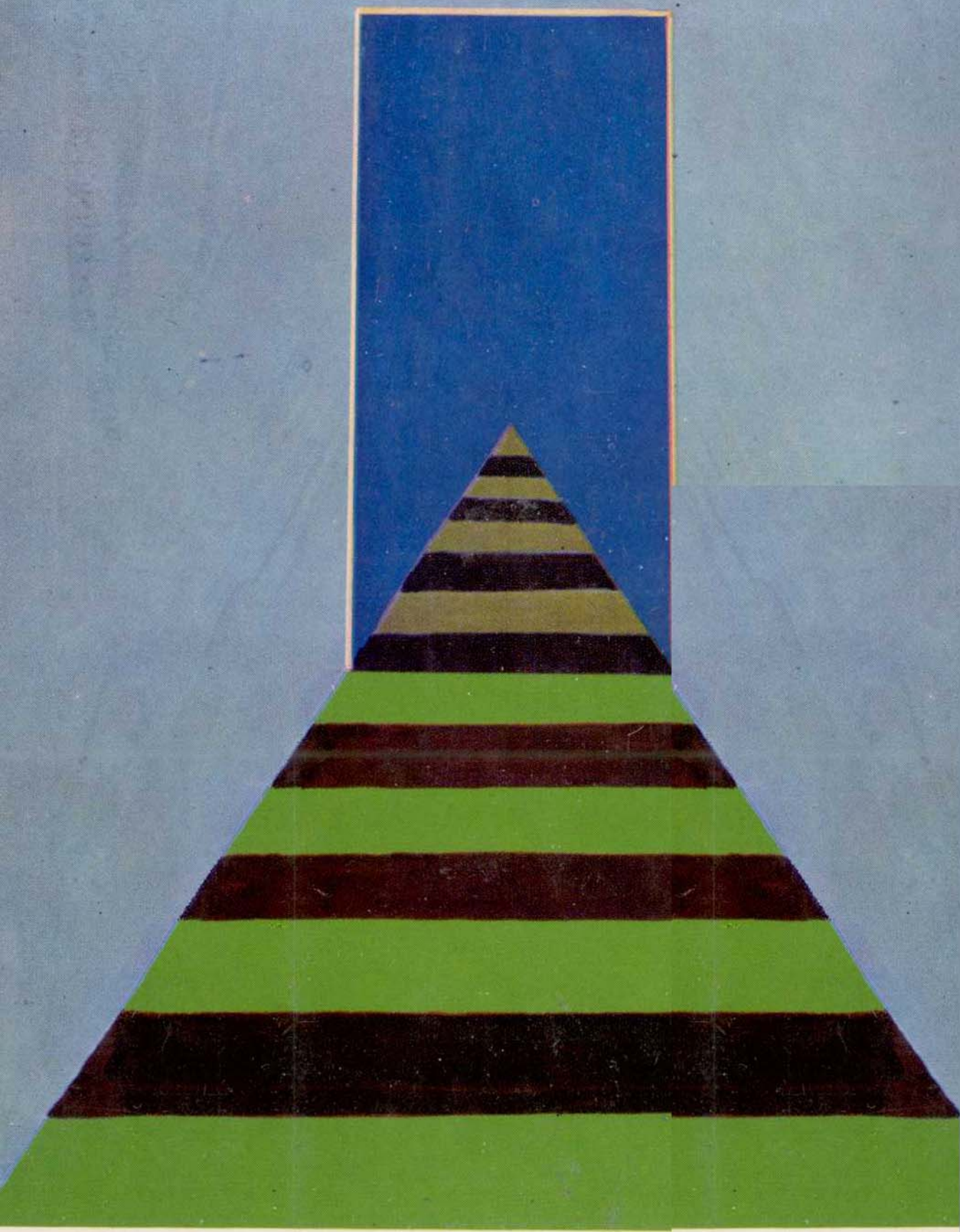


# 墮落論

坂口安吾



昭和三十三年五月三十日 初版発行  
昭和四十四年十一月三十日 十八版発行  
昭和五十四年五月三十日 改版三十二版発行

定価は、カバーに  
明記してあります

# 庫 文 川 角

ろん 論  
らく 落  
だ 墮



著者 坂口安吾

発行者 角川春樹

印刷者 渡辺竜祐

東京都豊島区東池袋二ノ四五

## 発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三  
●一〇二●東京●一九五二〇八

株式会社 角川書店

電話東京 (265) 七二二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

都印刷・本間製本

0195-110003-0946(3)

墮 落 論

坂 口 安 吾

角 川 文 庫

1536

本書は、著作権継承者の了解を得て、現代表記法により、  
原文を新字・新かなづかいにしたほか、漢字の一部をひ  
らがなに改めた。

（編集部）

## 目次

|         |     |
|---------|-----|
| 日本文化私観  | 五   |
| 青春論     | 三七  |
| 墮落論     | 八   |
| 続墮落論    | 九   |
| デカダン文学論 | 二二  |
| 戯作者文学論  | 二五  |
| 悪妻論     | 二五〇 |
| 恋愛論     | 二五  |
| エゴイズム小論 | 一五  |
| 欲望について  | 一七三 |

一七三 一五 二五 二五〇 二五 二二 九 八 三七 五

大阪の反逆

一八〇

教祖の文学

一九四

不良少年とキリスト

二二五

注 釈

二三九

解 説

坂口安吾―人と作品

磯田 光 一 二四六

作品解説

檀 一 雄 二五五

主要参考文献

二六一

年 譜

二六四

## 日本文化私観

## 一「日本的」ということ

僕は日本の古代文化についてほとんど知識を持っていない。ブルノー・タウト\*が絶讃する桂離宮も見ることがなく、玉泉も大雅堂も竹田も鉄斎も知らないのである。いわんや、泰蔵六だの竹源齋師など名前すら聞いたことがなく、第一、めったに旅行することがないので、祖国のあの町この村も、風俗も、山河も知らないのだ。タウトによれば日本における最も俗悪な都市だという新潟市に僕は生まれ、彼の蔑み嫌うところの上野から銀座への街、ネオン・サインを僕は愛す。茶の湯の方式など全然知らない代わりには、猥りに酔い<sup>みた</sup>れることをのみ知り、孤独の家居にいて、床の間などというものに一顧を与えたこともない。

けれども、そのような僕の生活が、祖国の光輝ある古代文化の伝統を見失ったという理由で、貧困なものだとは考えていない。(しかし、ほかの理由で、貧困だという内省には悩まされていくのだが――)

タウトはある日、竹田の愛好家というさる日本の富豪の招待を受けた。客は十名余りであった。

主人は女中の手をかりず、自分で倉庫と座敷の間を往復し、一幅ずつの掛け物を持参して床の間へ吊し一同に披露して、また、別の掛け物を取りに行く、名画が一同を楽しませることを自分の喜びとしているのである。終わって、座を変え、茶の湯と、礼儀正しい食膳を供したという。こういう生活が「古代文化の伝統を見失わない」ために、内面的に豊富な生活だと言うに至っては、内面なるものの目安があまり安直でめっちゃくちゃな話だけれども、しかし、無論、文化の伝統を見失った僕の方が（そのために）豊富であるはずもない。

いつかコクトオ\*が、日本へ来たとき、日本人がどうして和服を着ないのだろうと言って、日本が母国の伝統を忘れ、欧米化に汲々たるありさまを嘆いたのであった。なるほど、フランスという国は不思議な国である。戦争が始まると、まずまっさきに避難したのは、ルーヴル博物館の陳列品と金塊で、パリの保存のために祖国の運命を換えてしまった。彼らは伝統の遺産を受け継いできたが、祖国の伝統を生むべきものが、また彼ら自身にほかならぬことを全然知らないようである。

伝統とは何か？ 国民性とは何か？ 日本人には必然の性格があつて、どうしても和服を發明し、それを着なければならぬような決定的な素因があるのだろうか。

講談を読むと、我々の祖先ははなはだ復讐心が強く、乞食となり、草の根を分けて仇を探し廻っている。そのサムライが終わってからまだ七、八十年しか経たないのに、これはもう、我々にとっては夢の中の物語である。今日の日本人は、おおよそ、あらゆる国民の中で、おそらく最も憎悪心の多い国民の中の一つである。僕がまだ学生時代の話であるが、アテネ・フランスでロベール



ル先生の歓迎会があり、テーブルには名札が置かれ席が定まっています、どういふわけだか僕だけ外国人の間には生まれ、真正面はコット先生であった。コット先生は菜食主義者だから、たった一人献立が別で、オートミルのようなものばかり食っている。僕は相手がなくて退屈だから、先生の食欲ばかりもつぱら観察していたが、猛烈な速力で、一度匙をとりあげると口と皿の間を快速力で往復させ食べ終わるまで下へ置かず、僕が肉を一きれ食ううちに、オートミルを一皿すすり込んでしまう。先生が胃弱になるのはもつともだと思った。テーブルスピーチが始まった。コット先生が立ち上がった。と、先生の声は沈痛なもので、突然、クレマンソーの追悼演説を始めたのである。クレマンソーは前大戦のフランスの首相、虎とよばれた決闘好きの政治家だが、ちょうどその日の新聞に彼の死去が報ぜられたのであった。コット先生はボルテール流のニヒリストで、無神論者であった。エレジャの詩を最も愛し、好んでボルテールのエピグラムを学生に教え、また、みずから好んで誦む。だから先生が人の死について思想を通したものでない直接の感傷で語ろうなどとは、僕は夢にも思わなかった。僕は先生の演説が冗談だと思った。今に一度にひっくり返すユーモアが用意されているのだろうと考えたのだ。けれども先生の演説は、沈痛から悲痛になり、もはや冗談ではないことがハッキリわかったのである。あんまり思いもよらないことだったので、僕は呆気にとられ、思わず、笑いだしてしまった。——その時の先生の眼を僕は生涯忘れることができない。先生は、殺してもなおあきたりぬ血に飢えた憎悪を凝らして、僕を睨んだのだ。

このような眼は日本人にはないのである。僕は一度もこのような眼を日本人に見たことはなか

った。その後も特に意識して注意したが、一度も出会ったことがない。つまり、このような憎悪が、日本人にはないのである。「三国志」における憎悪、「チャタレイ夫人の恋人」における憎悪、血に飢え、ハツ裂きにしてもなおあき足りぬという憎しみは日本人にはほとんどない。昨日の敵は今日の友という甘さが、むしろ日本人に共有の感情だ。およそ仇討ちにふさわしくない自分たちであることを、おそらく多くの日本人が痛感しているに相違ない。長年月にわたって徹底的に憎み通すことすら不可能にちかくせいぜい「食いつきそうな」眼つきぐらいが限界なのである。

伝統とか、国民性とかよばれるものにも、時として、このような欺瞞ぎまんが隠されている。およそ自分の性情にうらはらな習慣や伝統を、あたかも生来の希願のように背負わなければならないのである。だから、昔日本に行なわれていたことが、昔行なわれていたために、日本本来のものだということとは成り立たない。外国において行なわれ、日本には行なわれていなかった習慣が実は日本人にふさわしいこともあり得るのだ。模倣ではなく、発見だ。ゲーテがシエクスピアの作品に暗示を受けて自分の傑作を書きあげたように、個性を尊重する芸術においてすら、模倣から発見への過程は最もしばしば行なわれる。インスピレーションは、多く模倣の精神から出発して、発見によって結実する。

キモノとは何ぞや？ 洋服との交流が千年ばかり遅かったただけだ。そうして、限られた手法以外に、新たな発明を暗示する別の手法が与えられなかっただけである。日本人の貧弱な体軀たいくが特にキモノを生み出したのではない。日本人にはキモノのみが美しいわけでもない。外国の恰幅かつぶくのよい男たちの和服姿が、我々よりも立派に見えるにきまっている。

小学生のころ、万代橋という信濃川の河口にかかっている木橋がとりこわされて、川幅を半分  
に埋めたて鉄橋にするというので、長い期間、悲しい思いをしたことがあった。日本一の木橋が  
なくなり、川幅が狭くなって、自分の誇りがなくなることが、身を切られる切なさであったのだ。  
その不思議な悲しみ方が今では夢のような思い出だ。このような悲しみ方は、成人するにつれ、  
また、その物との交渉が成人につれて深まりながら、かえって薄れる一方であった。そうして、  
今では、木橋が鉄橋に代わり、川幅の狭められたことが、悲しくないばかりか、きわめて当然だ  
と考える。しかし、このような変化は、僕のみではないだろう。多くの日本人は、故郷の古い姿  
が破壊されて、欧米風な建物が出現するたびに、悲しみよりも、むしろ喜びを感じる。新しい交  
通機関も必要だし、エレベーターも必要だ。伝統の美だの日本本来の姿などというもののよりも、  
より便利な生活が必要なのである。京都の寺や奈良の仏像が全滅しても困らないが、電車が動か  
なくては困るのだ。我々にたいせつなのは「生活の必要」だけで、古代文化が全滅しても、生活  
は亡びず、生活自体が亡びないかぎり、我々の独自性は健康なのである。なぜなら、我々自体の  
必要と、必要に応じた欲求を失わないからである。

タウトが東京で講演の時、聴衆の八、九割は学生で、あとの一、二割が建築家であったそう  
だ。東京のあらゆる建築専門家に案内状を送って、なおそのような結果であった。ヨーロッパでは  
決してこのようなことはあり得ないそうだ。常に八、九割が建築家で、一、二割が都市の文化に  
関心を持つ市長とか町長という名誉職の人々であり学生などの割りこむ余地はないはずだ、と言  
うのである。

僕は建築界のことについては不案内だが、例を文学にとって考えても、たとえばアンドレ・ジッポの講演が東京で行なわれたにしても、小説家の九割ぐらいは聴きに行きはしないだろう。そうして、やはり、聴衆の八、九割は学生で、おまけに学生の三割ぐらいは、女学生かもしれないのだ。僕が仏教科の生徒のころ、フランスだのイギリスの仏教学者の講演会に行ってみると、坊主だらけの日本のくせに、聴衆の全部が学生だった。もっとも坊主の卵なのだろう。

日本の文化人の怠慢なのかもしれないが、西洋の文化人が「社交的」に勤勉なせいでもあるのだろう。社交的に勤勉なのは必ずしも勤勉ではなく、社交的に怠慢なのは必ずしも怠慢ではない。勤勉、怠慢はとにかくとして、日本の文化人はまったく困った代物だ。桂離宮も見たことがなく、竹田も玉泉も鉄斎も知らず、茶の湯も知らない。小堀遠州などといえば、建築家だか、造庭家だか、大名だか、茶人だか、もしかすると忍術使いの家元じゃなかったかね、などと言う奴がある。故郷の古い建築を叩き毀して、でき損いの洋式バラックをたてて、得々としている。そのくせ、タウトの講演も、アンドレ・ジッポの講演も聴きに行きはしないのである。そうしてネオン・サインの蔭を酔っ払ってよろめきまわり、電髪嬢を肴にしてインチキ・ウイスキーを啣っている。呆れ果てた奴らである。

日本本来の伝統に認識も持たないばかりか、その欧米の猿真似に至っては体をなさず、美の片鱗をとどめず、全然インチキそのものである。ゲリー・クーパーは満員客止めの盛況だが、梅若万三郎は数えるほどしか客が来ない。かかる文化人というものは、貧困そのものではないか。しかしながら、タウトが日本を発見し、その伝統の美を発見したことと、我々が日本の伝統を

見失いながら、しかも現に日本人であることとの間には、タウトが全然思いもよらぬ距<sup>へだた</sup>りがあった。すなわち、タウトは日本を発見しなければならなかったが、我々は日本を発見するまでもなく、現に日本人なのだ。我々は古代文化を見失っているかもしれないが、日本を見失うはずはない。日本精神とは何ぞや、そういうことを我々自身が論じる必要はないのである。説明づけられた精神から日本が生まれるはずもなく、また、日本精神というものが説明づけられるはずもない。日本人の生活が健康でありさえすれば、日本そのものが健康だ。彎曲<sup>わんきよく</sup>した短い足にズボンをはき、洋服をきて、チョコチョコ歩き、ダンスを踊り、畳をすてて安物の椅子テーブルにふんぞり返って気取っている。それが欧米人の眼から見て滑稽<sup>こっけい</sup>千万であることと、我々自身がその便利に満足していることの間には、全然つながりがないのである。彼らが我々を憐<sup>あは</sup>れみ笑う立場と、我々が生活しつづつある立場には、根柢的に相違がある。我々の生活が正当な要求にもとづくかぎりには、彼らの憫笑<sup>びんしょう</sup>がはなはだ浅薄でしかないのである。彎曲した短い足にズボンをはいてチョコチョコ歩くのが滑稽だから笑うというのは無理がないが、我々がそういう所にこだわりを持たず、もう少し高い所に目的を置いていたとしたら、笑う方が必ずしも利巧なはずはないではないか。

僕は先刻白状に及んだとおり、桂離宮も見たことがなく、雪舟も雪村も竹田も大雅堂も玉泉も鉄斎も知らず、狩野派<sup>かのの</sup>も運慶も知らない。けれども、僕自身の「日本文化私観」を語ってみようと思うのだ。祖国の伝統を全然知らず、ネオン・サインとジャズぐらいしか知らない奴が、日本文化を語るとは不思議なことかもしれないが、すくなくとも、僕は日本を「発見」する必要だけはなかったのだ。

## 二 俗悪について（人間は人間を）

昭和十二年の初冬から翌年の初夏まで、僕は京都に住んでいた。京都へ行ってどうしようという目当てもなく、書きかけの長篇小説と千枚の原稿用紙のほかにはタオルや歯ブラシすら持たないといういでたちで、とにかく隠岐<sup>おき</sup>和一を訪ね、部屋でも探してもらって、孤独の中で小説を書きあげるつもりであった。まったく、思いだしてみると、孤独ということがただ一筋に、なつかしかったようである。

隠岐は僕に京都で何が見たいかということと、食物では何が好きかということとを、最もさりげない世間話の中へ織り込んで尋ねた。僕は東京でザックバランにつきあっていた友情だけしか期待していなかったのに、京都の隠岐は東京の隠岐ではなく、客人をもてなすために最も細心な注意を払う古都のぼんぼん<sup>ぼんぼん</sup>に変わっていた。僕は祇園<sup>ぎおん</sup>の舞妓<sup>まいこ</sup>と猪<sup>いのしし</sup>だとウツカリ答えてしまったのだが——まったくウツカリ答えたのである。なぜなら、出発の晩、京都行きの送別の意味で尾崎士郎に案内され始めて猪を食ったばかりで、もののハズミでウツカリ言ってしまったけれども、第一、猪の肉というものが手軽に入手できようなどとは考えていないせいでもあった。ところが、その翌日から毎晩毎晩猪に攻められ、おまけに猪の味覚が全然僕の嗜好<sup>しこう</sup>に当てはまるものではないことが、三日めくらいに決定的にわかったのである。けれども、我慢して食べなければならなかった。そうして、一方舞妓の方は、京都へ着いたその当夜、さっそく花見小路のお茶屋に案内されて行ったのだが、そのころ、祇園に三十六人だか七人だかの舞妓がいるということだったが、

酔眼朦朧たる眼前へ二十人ぐらいの舞妓たちが次から次へと現われた時には、いささか天命と諦めて観念の眼を閉じる気持ちになったほどである。

僕は舞妓の半分以上を見たわけだったが、これぐらい馬鹿らしい存在はめったにない。特別の教養を仕込まれているのかと思っていいたら、そんなものは微塵もなく、踊りも中途半端だし、タキーとオリエの話ぐらいしか知らないのだ。それなら、愛玩用の無邪気な色気があるのかというコマツチャクレているばかりで、清潔な色気などは全くなかった。もともと、愛玩用につくりあげられた存在にきまつているが、子供を条件にして子供の美德がないのである。羞恥がなければ、子供はゼロだ。子供にして子供にあらざる以上、大小を兼ねた中間的な色っぽさがあるかという、それもない。広東に盲妹という芸者があるということだが、盲妹というのは、顔立ちの綺麗な女子を小さいうちに盲にして特別の教養、踊りや音楽などを仕込むのだそうである。中国人のやることは、あくどいが、徹底している。どうせ愛玩用として人工的につくりあげるつもりなら、これもよからう。盲にするとは癡った話だ。ちと、あくどいが、不思議な色気が、考えてみても、感じられる。舞妓ははなはだ人工的な加工品に見えながら、人工の妙味がないのである。娘にして娘の羞恥がない以上、自然の妙味もないのである。

僕たちは五、六名の舞妓を伴って東山ダンスホールへ行つた。深夜の十二時に近い時刻であった。舞妓の一人が、そのダンサーに好きなのがいるのだそうで、その人と踊りたいと言いだしたからだ。ダンスホールは東山の中腹にあって、人里を離れ、東京の踊り場よりはるかに綺麗だ。満員の盛況だったが、このとき僕が驚いたのは、座敷でペチャクチャしゃべっていたり踊ってい

たりしたのではないっこうに見栄えのしない舞妓たちが、ダンスホールの群集にまじると、群を圧し、堂々と光彩を放って目立つのである。つまり、舞妓の独特のキモノ、だらりの帯が、洋服の男を圧し、夜会服の踊り子を圧し、西洋人もてんで見栄えがしなくなる。なるほど、伝統あるものには独自の威力があるものだ、と、いささか感服したのであった。

同じことは、相撲を見るたびに、いつも感じた。呼び出しにつづいて行司の名乗り、それから力士が一礼しあって、四股をふみ、水をつけ、塩を悠々とまきちらして、仕切りにかかる。仕切り直して、ややしばらく睨み合い、悠々と塩をつかんでくるのである。土俵の上の力士たちは国技館を圧倒している。数万の見物人も、国技館の大建築も、土俵の上の力士たちに比べれば、あまりに小さく貧弱である。

これを野球に比べてみると、二つの相違がハッキリする。なんというグラウンドの広さであろうか。九人の選手がグラウンドの広さに圧倒され、追いまくられ、数万の観衆に比べて気の毒なほど無力に見える。グラウンドの広さに比べると、選手を草刈人夫に見立ててもいいぐらい貧弱に見え、プレーをしているのではなく、息せききって追いまくられた感じである。いつかベース・ルースの一行を見た時には、さすがに違った感じであった。板についたスタンド・プレーは場を圧し、グラウンドの広さが目立たないのである。グラウンドを圧倒しきれなくとも、グラウンドと対等ではあった。

別に身体のせいではない。力士といえども大男ばかりではないのだ。また、必ずしも、技術のせいでもないだろう。いわば、伝統の貫禄だ。それあるがために、土俵を圧し、国技館の大建築



を圧し、数万の観衆を圧している。しかしながら、伝統の貫禄だけでは、永遠の生命を維持することはできないのだ。舞妓のキモノがダンスホールを圧倒し、力士の儀礼が国技館を圧倒しても、伝統の貫禄だけで、舞妓や力士が永遠の生命を維持するわけにはゆかない。貫禄を維持するだけの実質がなければ、やがては亡びるほかに仕方がない。問題は、伝統や貫禄ではなく、実質だ。

伏見に部屋を見つけるまで、隠岐の別宅に三週間ぐらい泊まっていたが、隠岐の別宅は嵯峨にあつて、京都の空は晴れていても、愛宕山が雲をよび、このあたりでは毎日雪がちらつくのだった。隠岐の別宅から三十間ぐらいの所に、不思議な神社があつた。車折神社というのだが、清原のなにがしというたぶん学者らしい人を祀っているくせに、非常に露骨な金儲けの神様なのである。社殿の前に柵をめぐらした場所があつて、この中に円みを帯びた数万の小石が山をなしている。自分のほしい金額と姓名年月日などを小石に書いて、ここへ納め、願をかけるのだそうである。五万円というものもあるし、三〇円ぐらいの悲しいような石もあつて、まれには、月給がいくらボーナスがいくら昇給するようにと詳細に数字を書いた石もあつた。節分の夜、燃え残った神火の明かりで、この石を手執りあげて一つ一つ読んでいたが、旅先の、それも天下に定まる家もなく、一管のペンに一生を托してともすれば崩れがちな自信と戦っている身には、気持ちのいい石ではなかった。牧野信一は奇妙な人で、神社仏閣の前を素通りすることのできない人であつた。必ずうやうやしく拝礼し、ジャランジャランと大きな鈴を鳴らす綱がぶらさがってあれば、それを鳴らし、お賽銭をあけて、しばらく瞑目最敬礼する。お寺が何宗であろうと変わりはない。